

のときに使うブラシに、拾い集めてきたいろんな人の髪の毛をからめておいたり。

少しずつ、がコツだった。

いっぺんにやってしまうと、あまり効果はない。気のせいかもしれない、と思うぐらいが、ちょうどいいのだ。

種はちよつとずつ、芽を出しつつある。

スナミさんの表情は、日ごとにかたくなってきていた。

仲のいい女の子たちと輪になっておしゃべりしているときも、あまり自然に笑えていない。

そうして一週間ほどが経ったある日。

スナミさんが突然、思いがけない行動に出た。

みんなに気づかれないよう、休み時間にこっそり、小さく折りたたんだ手紙をカセくんに渡したのだ。

カセくんは一瞬、びっくりしたような顔をして、でも、すぐにその手紙を、はおっていたパーカのポケットにしま

いこんだ。

スナミさんも、カセくんのそばをはなれたあととはなにごとともなかったような顔をして自分の席へもどっていったので、だれもその手紙の受け渡しには気がついていないようだった。

気がついていたのは、ゴミ箱のかけからこっそり盗み見をしていたメアリーだけ。

放課後、いつもどおりに仲のいい女子数人とつれだって

下校したスナミさんは、いったん家にもどると、すぐにまた外に出てきた。

急ぎ足でスナミさんが向かったのは、バス停の近くにぼつんとひとつだけあるパン屋さんだった。白い壁に赤い屋根がなんともかわいらしいお店だ。

こっそりスナミさんのあとをつけていったメアリーは、そのパン屋さんの前に立っていた男の子を見つけて、あつと思つた。

そうか、あの手紙は、学校が終わったあとにこのパン屋さんの前で待ち合わせをするためのものだったんだ――。

パン屋さんの前にいたのは、カセくんだった。

「ごめんね、急に呼び出したりして」

少し息を切らしながらスナミさんが近づいていくと、

「それは別にいいけど、なんで《アベイユ》の前なの？」  
と言いながら、カセくんも、スナミさんのほうへと足を

進めた。《アベイユ》というのは、このパン屋さんの名前だ。

「うちと加瀬くんのおうちからだ」と、《アベイユ》がちょうど中間ぐらいかなと思つて」

「あ、なんだ。そういうこと」

「うん、そういうこと」

カセくんは、ガラス張りの店内にちらっと目をやってから、なあ、と言つた。

「ついでだから、なんか買ってかない？」